

新潟教育研究所

令和7年5月30日発行 第57号

公益財団法人新潟教育会
新潟教育研究所

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館

TEL・FAX 025-222-2971
E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

グループワークの 指導技術の向上に向けて

新潟青陵大学
福祉心理子ども学部
学部長・教授

中野啓明



平成29年に改訂された現行の学習指導要領のもと、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現に向けた方策の一つとして、グループワークが用いられることが多くなっています。

昨年度参観した授業においても、必ずと言っていいほど、何らかの形でグループワークが行われていました。ただし、同じグループワークといっても、話し合うテーマや課題、時間設定等は、授業によって様々でした。

先生方も、授業の中で、何らかの形でグループワークを取り入れていただけることと思います。

グループワークの様子を見てみると、まずは順番に発表し、グループで出された意見をミニ・ホワイトボード等にまとめ、グループ毎に発表するという流れのものが多く見受けられます。

ですが、ここでいくつかの疑問が生じます。

一つ目の疑問は、情報交換するための場であるならば、周りの席の人と、2分程度で意見交換することと、何が違うのかという点です。

子どもたちの様子を見てみると、グループワークの流れの中にある、最初の「まずは順番に発表する」という部分だけで、多くの時間を取ってしまう場合が多いのではないのでしょうか。

限られた授業時間内の時間配分を考えるならば、グループで話し合うことと、周りの席の人と2分程度で話し合うことを区別すべきではないのでしょうか。その上で、グループで話し合うことの内実を精査していく必要があるのではないのでしょうか。

より具体的に述べるならば、クラス全員の意見

を集約し、共有した後に、議論するということは、1人1台端末が定着した現在では、簡単に、かつ短時間でできる環境となりました。そのような前提に立ったとき、グループワークの流れと内実を見直す必要があるのではないのでしょうか。

二つ目の疑問は、グループワーク時に、教師はどのような援助を行っているのかという点です。

多くの先生方は、話し合いの様子を、グループ毎に順番に見て回っているのではないのでしょうか。

ここで問題となるのは、各グループの話し合いの途中の様子を教師はいかに把握し、どのような援助を行っているか、ということです。グループワークの成果物は、グループのまとめを発表することで確認することはできます。しかし、こうした指導の問題点は、話し合いの過程で教師がどのような援助を行っているのか不明であるという点にあります。

この意味で、私は、クラス全体に対しての指導よりも、グループワークの際の援助の方が、教師の力量が試されていると考えています。

GIGAスクール構想のもと、整備されたタブレット端末等を活用することによって、教師は、グループワークの様子を簡単にモニタリングすることも可能となっています。つまり、このグループは、何を話しているか、どこで行き詰まっているかをリアルタイムで把握することが可能となっています。

今こそ、グループワークの指導技術の向上を図る必要があるのではないのでしょうか。

第1期 教育スペシャリスト育成事業 受賞者の紹介

令和5・6年度に実施された第1期教育スペシャリスト育成事業には、14名の方々から応募頂きました。昨年度はまとめの年でしたが、研究論文選考会において4名の方の受賞が決定しましたので紹介します。



<最優秀論文>

大矢 寿和 新潟大学附属長岡中学校 教諭 外国語

「ライティングにおけるアウトプットを広げ・深める、ブレインストーミングの効果」
～マッピングとコミュニケーションストラテジーの活用を通して～

<優秀論文> 該当無し

<入選論文>

伊藤 陽子 新潟市立新通小学校 教諭 国語

「文学教材における個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図る単元構想」
～追究内容の選択と共有方法の改善を通して～

<入選論文>

藤井 大輔 長岡市立川崎小学校 教諭 算数

「思考力を育む数学的コミュニケーションを目指す算数授業の在り方」
～最適解を作り出す活動とアイデアの価値を判断する活動を通して～

<入選論文>

笹川 歩希 長岡市立下川西小学校 教諭 体育

「自己調整学習を目指した児童と教師でデザインする体育授業」
～児童と教師が共同的にループリックを作成する跳び箱運動の実践を通して～

新潟大学の宮菌衛名誉教授や教職大学院の大庭昌昭教授はじめ、専門家の先生方や現場の指導的立場の先生方から、第一次・第二次の選考をして頂きました。選考会では、応募論文全体に対して「論文は他者から読んで貰うものという相手意識をもつこと」「教育論文としては素晴らしいが、目線をもう少し先の学術論文まで目指して欲しい」等たくさんのご指導やご助言を頂きました。

第2期「教育スペシャリスト育成事業」(令和7～9年度)の募集を開始します

今年度から教育スペシャリスト育成事業は第2期となります。

この事業は、教職員の研究意欲と資質・指導力の向上を目的とする3年間に渡る事業です。応募者には、研究内容を審査の上、研究活動費を助成します。

1年目は実践の年、2年目は実践研究を研究論文としてまとめて提出していただく年となります。提出いただいた研究論文は、選考委員会の選考を経た上で表彰します。論文入選者からは、3年次として研究をブラッシュアップし、その取組み結果を報告していただきます。

応募開始は5月下旬の見込みです。詳しくは、教育スペシャリスト育成事業募集要項をご覧ください。

令和7年度新潟教育研究所事業 Support, Information & Opinion S. I. O. の充実をめざします

第17回教師力アップ講座

- 日時 令和7年7月19日(土) 午前9時45分～
- 会場 新潟教育会館(新潟市中央区西大畑町590-3)
別紙「第17回教師力アップ講座」の案内状をご覧くださいの上、お申し込みください。

第1講座

「子ども一人一人の自律性を支援する授業づくり」

子ども自ら学びを進めていくためには、自分ができることを自覚したり、学び方を想起したりすることが大切です。第1講座では、子ども自身が学びを進めるための自律性とは何かを学び、模擬授業を通して学びに必要な支援の方法の体験的な理解を進めます。

第2講座

「子ども一人一人が自走する学びに向かう単元づくり」

子どもが見通しをもち、計画を立てて単元を進めていくことができれば、自己のペースを意識した学び方を実現する機会ができます。単元づくりのポイントは、どこで習得し、どこで活用できるかを想定し、子ども自身が活用の方法を選択・決定していくことのできる場面を設定することです。実際の単元づくりを演習しながら学びます。

今年度もタイムリーかつ魅力的な内容を、お二人の講師からご指導いただきます。



講師 堀田 雄大 様
経歴
新潟大学附属新潟小学校 教諭
文部科学省初等中等教育局
教育課程課 専門職
新潟市立総合教育センター
指導主事
新潟青陵大学 助教



講師 落合 悠太 様
経歴
新潟市立内野小学校 教諭
新潟市立女池小学校 教諭

教育アドバイザー派遣事業の推進

教育アドバイザー派遣事業は、要請に応じて登録いただいている教育アドバイザーを派遣し、学校



及び先生方を支援する制度です。校内研修はもちろんですが、授業研究会、PTA講演会、研究サークルへの派遣申請が多く見られます。個人研修の要請にも応じますので、ご利用ください。

教育アドバイザーの選定は、「教育アドバイザーリスト」をご覧ください。12月には、令和7年度登録者を加えた新リストをHPにアップします。(リストの配布は行っていません)

教育アドバイザーの派遣について

要請の仕方

校内研修で、研究会で、PTAの講演会で、研究サークル、個人等で、「あの先生にアドバイスを受けたい、話をしてもらいたい」と思ったら……

- 1 まず事務局にお電話をください。
新潟教育会事務局「025-222-2971」へ
招請したい教育アドバイザー、期日、内容、会場、参加人数等をお知らせください。
- 2 事務局が教育アドバイザーに連絡をとります。
- 3 依頼者に承諾の結果をお知らせします。
- 4 応諾であれば、依頼者が教育アドバイザーに詳細を連絡してください。

* 事前に教育アドバイザーと連絡を取り、結果を事務局にお知らせいただく形でも結構です。

派遣経費について

交通費を考慮した謝金は、年度内で連続して同一の教育アドバイザー派遣を要請する場合、初めの1回分だけ当方が負担します。2回目以降は利用者が負担となります。教育委員会からの要請はご相談ください。